東京科学大学 DX 推進基本戦略

日々の活動が情報資産に変わる、データ駆動型協創大学へ

【基本理念】

東京科学大学は、「『科学の進歩』と『人々の幸せ』とを探求し、社会とともに新たな価値を創造する」の理念を実現させるために、教育・研究・診療・運営・経営のあらゆる活動においてデジタル技術を活用してデータ連携を推進するとともに、部局や事務組織が横断的に連携する協力体制を構築し、構成員が最低限の入力で済み、重複入力や手作業によるミスが自動的に排除される環境を整備し、効率的かつ正確な情報循環を実現します。これにより、単なるペーパーレス化やデジタル化（Digitization・Digitalization）を超え、業務プロセスの変革とともに、教育・研究・運営の効率化や働き方改革を通じて、組織の柔軟性と活力の向上を促進します。こうした取組によって、データが円滑に連携・循環し、新たな価値を生み出す『データ駆動型協創大学』への進化を図ります。また、AI などの先端技術も活用可能な基盤を整備し、未来志向の教育研究・業務運営・経営を推進します。

【原則】

- **全員参加の DX 文化の醸成**：すべての教職員・学生が DX の担い手となり、自身が関わるデータの流れや活用を意識した業務改善・学習改善・効率化を実践し、各部署が連携して支え合う文化を育てます。
- **一貫したデータライフサイクルの確立**：学内を流通するデータは入力段階から再利用を前提として設計し、発生源での一度だけの入力とマスターデータとの連携により、繰り返し入力の手間やミス、不整合を防ぎます。
- **デジタルファーストの業務プロセス設計**：日常業務についてはデジタル環境の利用を前提にプロセスを再設計し、オンラインで完結できる柔軟かつ効率的な業務遂行を可能にし、多様な働き方に対応します。
- **継続的改善の実施**：データライフサイクルと業務改革は継続的に評価・改善し、属人化を防ぎ、持続可能な組織運営を目指します。

【基本戦略】

1. **段階的デジタル変革の推進**：データの電子化（Digitization：紙媒体等の情報をデジタル化）、業務プロセスのデジタル化（Digitalization：業務の効率化・自動化）、組織・社会の変革（Digital Transformation：新たな価値創出や働き方の変革）の三段階を意識し、既存システムの更新タイミングを活用しながら現場への負担を最小限に抑え、着実な変革を実現します。
2. **マスターデータ管理システム※の構築と活用**：人、組織、施設など、様々な業務に必要となる学内の基幹データ（マスターデータ）を適切に整備・管理し、どの業務システムでも最新の正確な情報が得られるようにします。これにより、業務システム間の連携が促進されるとともに、情報の不整合や欠損が解消されるだけでなく、研究・教育等の日常業務を行うだけで、教員や組織の評価情報が正確に蓄積され、評価や開示のための書類作成業務が大幅に削減されるなど効率的なデータ活用が促進されます。また、複数の業務システムのデータを横断的に活用することで、新たな分析や意思決定支援が可能となり、大学全体の運営改善や価値創出につながります。

   ※ここでいう『マスターデータ管理（Master Data Management：MDM）システム』は、人・組織・施設などの基幹データを一元管理し、その正確性と最新性を維持するためのシステムです。一方、『業務システム』は教育・研究・診療・運営・経営など各種業務を支える個別のシステム群を指します。MDM はこれら業務システムの基盤として機能し、両者が連携することで二重入力や情報不整合を排除します。
3. **業務プロセス変革**：現行業務プロセスを分析・可視化し、「入力→蓄積→流通→再利用」などの通り適切なデータライフサイクルを組み込んだ最適なプロセスを設計します。ワークフロー管理システムの導入により、プロセスの自動化と標準化を実現し、日常業務を行

うだけで質の高いデータが自動生成される仕組みを構築します。

4. **DX 人材育成と意識改革**：DX 推進のための教育研修や意識改革プログラムを実施し、すべての教職員・学生が自発的に DX 活動を推進できるように、人材を育成します。